

## 保育と子どもを取りまく状況 ②

理事長 かたやまよしのり 片山喜章

「……有史以来、人類が経験したことのない激変した社会状況、何か大事なものが壊れ、新たな何かが生まれようとしている、そんな時代の到来に呼応した「保育の内容」や「園生活」の姿を描きだす取り組みをすすめています。 (4月号より転載)

まもなく、幼保が一体となる「認定こども園」の制度が誕生します。これまで保育園界では「教育」という文言をほとんど使ってきませんでした。しかし、この慣習が大きく変わる可能性があると思われます。本来、「保育」=教育+養護なので、保育園では、教育という表現をあえてする必要はなく、また、教育=教え込みというイメージが強いために、乳幼児期の育ちを促す言葉として適当ではないと論じる保育関係者も多くいました。一方で「保育」が“hoiku”として、世界の国々に影響をあたえはじめています。その一方で、本家本元の日本では、少しずつ「乳幼児期の教育」という表現が増えつつあります。幼稚園の世界では、「幼児教育」といい、学校教育との接続を念頭に教育内容の向上に努めています。

私の場合、幼稚園界との関わりが深いために、「保育」、「教育」は、言葉として使い慣れているか否かの問題で、保育でも教育でも大差はないと感じてきました。しかし最近、自園において、「教育」「課題」「指導」「意図性」という文言を多用しながら、日々の保育を教育的な観点で創り直そうと試みはじめています。その年齢の子ども(ということは職員集団)にとって必要な課題を明確にして提示する → 課題の達成状況を把握する → 達成状況に応じた支援のあり方を探って個別指導を含めて子どもたちに返す。テーマ活動や当番活動の他にコーナーでの遊びの中にも意図性を盛り込んでいこうと画しているところです。

なぜなら、冒頭の「4月号」の掲載部分で述べているように、社会の変化(IT、バーチャル)があまりにも激しくて、これまでのように、ただ保育環境を整えて、子どもどうしが遊んで=学んでいるだけでは、社会の変化に対応する力が備わらないと考えるからです。

例えば、ピアノ(鍵盤ハーモニカ)のスキルは、子どもの興味・関心に沿う形で、得意な子どもたちが集って、かなり難しい曲にもチャレンジできる時間を保障し、お披露目の場(誕生会など)で、みんなに聴いてもらう経験を味わいます。それが、とても大事です。

そして、苦手な子に対しては、「しなくていいよ」ではなくて、「課題」として、基礎となる2曲はマスターできるように「指導」します。その際、その子にかかわる保育者の“やさしさ”と“丁寧さ”が「教育」として必要になります。苦手な事も、保育者(担任とは限らない)という「人間」との関わり合いのなかで小さな達成感(TVゲームでの達成感とは異質)を経験する、そんな「意図性」を持った「教育」を、実践していきたいと思えます。